

基調講演『日本人の国際競争力』 ～パラダイムを変えられるか～

株式会社岡本アソシエーツ 代表
岡本 行夫 氏

[本稿は、2006年11月22日開催の富士通総研フォーラム2006「新たな社会システムの胎動」(場所:経団連会館11階国際会議場)における基調講演を抄録したものです。]

1. はじめに

(主な講演内容)

- ・日本の外交政策や国際情勢について
- ・日本が世界の中でだんだん影が薄くなってきているのではないか
- ・国際社会との競争に伍して行くための、パラダイム変換の必要性

2. 国際社会の中で薄くなる日本の影 “Marginalize”

(1)市場経済化の潮流

・かつて日本経済はOECD加盟国の7～8億人だけを対象としていましたが、冷戦構造の終結にともない、ソ連邦、中国、東欧諸国、ベトナム、インドなど、世界的な市場経済化が相次ぎ、今や35億人規模の大きなマーケットとなり、モノづくり国家は厳しい競争環境となっています。

(2)中国の台頭と日本の “Marginalize”

・私がお会いしたドイツのシュレーダー首相（当時）は、「これから新しい世界の地殻変動の中でどうやって生存していくのか」ということを国の最高首脳として自ら深刻に考え、毎年、中国へ行って、どうしたらドイツが国際競争に勝てるかということを研究していました。

・日本の国際競争力は、スイスにある有名なIMD（International Institute for Management Development）の指標によれば、80年代の後半から92年か93年までは、ずっとそのランキングで1位だったものの、今年は第17位と落ちてきています。日本が世界の中で、際（きわ）へ押しやられて（＝ “Marginalize” ）しまうかもしれません。

・私は、世界中いろいろなところへ行きますが、今までは、だいたい「おまえは日本人か」と聞かれていました。ところが、最近は、まず聞かれるのは、「おまえ、中国人か」。そのくらい日本人の影が薄くなって、中国人が至るところにいます。

・このあいだ、私はアイルランドへ行きましたが、アイルランドという人口400万人の小さ

な国に、中国人が、なんと10万人も住んでいるのです。

- ・E Uと話をするためにブラッセルへ行き、日中関係の話を日本の立場で講演しましたが、だいたいどの会場でも、「このあいだ、中国人の講師が来て、あなたとちょうど反対のことを言っていたよ」というコメントが出るように、至るところで中国が進出してきていて、日本人の影が相対的に薄くなってきています。

- ・私はアメリカにも頻繁に講演に行くのですが、集まってくれる人の数が少なくなっています。日本については、政治家が行っても100人程度で多くて200人くらいですが、中国の場合だったら、800人～1,000人規模は集まるでしょう。

- ・1年で日本に来るアメリカの議員団は、だいたい2つか3つです。中国は、その10倍、20倍という数が行くようになってきていると聞きました。

- ・このあいだ、シリコンバレーでアジアを研究するアメリカ人の学者2人と話をしました。彼らは、アジアのことを学生たちに教えていますが、中国にはこの3年間で20回くらい行ったが、日本には行ったことがないと言います。かつてでは考えられないことですが、今は、日本に行かなくてもアジアのことを大学で教えられるようになってしまっているのです。

- ・日本はストックの存在としては大きく、アジアのGDPの、今でも3分の2近くあります。しかしながら、新しいところで何が起こっているかという場面では、日本の姿は見えなくなってきました。

- ・このあいだの安保理の常任理事国入りの選挙、日本は世界中で大キャンペーンを繰り広げました。日本、ドイツ、ブラジル、インドの4カ国が共同提案国探しを行い、ヨーロッパでは、フランスをはじめ11カ国がドイツのために共同提案国になると手を上げました。ところが、日本とインドがアジアで得たのは合わせても、ブータンと、モルディブと、アフガニスタンのわずか3カ国。日本は、自分たちが考えていたような支持がアジアの中で得られなくなっています。

- ・特に東南アジアについては、日本は巨額のODAをつぎ込み、企業をはじめとする日本人の懸命な努力によって、何百万人というアジアの人たちをトレーニングしてきました。そして、多くの親善訪問を重ね、人物交流をやり、みんな日本のために手を上げてくれると思ったら、誰一人、手を上げなかった。これは、相当深刻な“Marginalization”だと私は思っています。

(3)日本と中国とのゼロサムの関係

- ・エチオピアは人口7200万人もいますが、日本の経済援助は、40億円くらいです。中国は、それ以上に無償、有償を含めて支援をしています。中国は、エチオピアだけでなく、アフリカ全体に、ものすごい勢いで資源を買いあさっています。

- ・中国は、世界のタングステン産出の90%を自国で押さえています、さらに、1兆ドル

の外貨準備を活かし、さらに外国の鉱山まで押さえにかかってきています。この鉱物資源を彼らは囲い込むことで、工具の製造をコントロールしようとしています。彼らは非常に大きな戦略を描いてこのようなことをやっているように思えます。

- ・中国は世界にとっても、日本にとっても最も大切な経済市場であり、今後、益々その傾向が強まると思われます。中国との現在の関係を改善して発展させなければならず、日本は、きちんと自国の利益を担保する戦略を持たなければなりません。

- ・ゼロサムの関係とは、一方の利益はそのまま、もう一方の不利益になるというものです。今は、残念ながら、アジアにおいては、中国と日本がゼロサムの関係となりつつあるのではないのでしょうか。国連の安保理の常任理事国入りの問題など、中国は日本の影響を排除し、そのために自分の勢力を扶植しているというところがあると思われます。

- ・中国は、鮮やかな外交活動を展開しています。おそらく、世界で最も効果的な外交活動を展開しているでしょう。しかし、日本は、どのような戦略のもとに外交をやっているのかという大きな構図というのはありません。現段階で、中国とゼロサムゲームをやっても不利です。

(4)中国の経済成長と国家戦略

- ・中国は、ずっと8%台で経済成長をしています。このまま30年間成長が続けば、彼らの経済規模が9倍となり、資源の消費量も13億人×9という数字となります。このことを考えると、資源は何でも、全部自分たちが買い集める、ということにつながります。

- ・私の外務省同期生は、インドへの2回目の赴任の際に、「俺が1回目にインドへ行った時の人口は6億だった。2回目に行く時は11億だ」というわけです。20年後くらいには、インドは、やがて18億人の人口になって16億の中国を抜き、インド人と中国人だけで33億人になります。こういう世の中になってきています。

- ・彼らが成長にかけるドライブにはものすごいものがあります。中国の場合には、国内の格差の広がりから中国国内が不安定化してきています。したがって、中国共産党は、一党独裁体制を維持し続けるためにも、経済成長をとにかく加速化して、そして全体のパイを大きくして、その中で格差を解消していくしかありません。恐らく私は、中国は大混乱になるという事態を経ないまま、うまくソフトランディングするのではないかと思うようになってきています。そのために、中国は必死で、国内の改革、そして格差の是正というものに努めています。

- ・中国の指導部が朝から晩まで考えているのは、戦略的に中国の国をどうしようか、外交をどう展開していくかということです。日本の政治というのは、そういった大きな戦略よりは、政局のことで頭がいっぱいではないかと思われる場面が多いです。

- ・シリコンバレーや北京などのベンチャー企業で活躍する中国人は、声だけを聞くと中国人かアメリカ人か分からないくらい、英語力がうまいし、それ以上に、マーケットのコン

セプトやテクノロジー把握の深さなどに優れています。多くの日本のベンチャーは、基本的には、まだ依然としてeビジネスを基盤にして、テクノロジー的にも秀れたところは多くありません。中国の今のベンチャーのレベルの高さには相当なものがあります。

・中国は、党大会で確実に世代交代を進めてきますから、第5世代の次の世代が中国を指導するようになってきます。このような中で、日本は、これからどうやって彼らと対抗していくのか、やはりパラダイムを変えなければいけません。

(5)同質化する日本人

・日本の社会は大変に居心地がいいが、その分、情熱や感動が少なくなっているのではないのでしょうか。

・大阪万博は6,400万人、愛知万博は2,200万人と日本人の来場者が3分の1となっています。また、世論調査で、「あなたは万博へ行ってみたいですか」という質問に対して、「私は行くつもりはありません」といった人が、大阪万博では21%、愛知万博では44%。我々は、みんな冷めてきてしまっています。

・日本アカデミー賞受賞映画「三丁目の夕日」という映画がありました。これは、昭和33年の東京の様子を描いた映画で、当時は生活が貧しかったが、このような状況の中で、自分たちの生活は必ず良くなるという、望みが常にあり、発展が目に見える形で分かりました。力道山のプロレスがテレビに出れば、何百人、何千人という人がテレビの前を黒山のように埋め尽くし、長嶋茂雄がデビューした頃の国民的な熱気は、今の松井だ、松坂だ、イチローまで合わせても、長嶋一人の人気にはかなわなかったくらい国民的に熱狂していました。このような熱気が物質的な豊かさとともに、我々はだんだん冷めてきてしまいました。

・今、いろいろな世論調査をとると、特に、若い人たちの間にハングリー精神がありません。高いお金をもらえる仕事よりは、自分ではそこそこ満足していただける仕事がいい、という結果となります。それとは別に、その間に我々の生活はどんどんと豊かになってきています。

・「ウェブ進化論」の著者の梅田望夫さんは、日本の若い人たちをシリコンバレーに呼ぼうという大計画を続けています。シリコンバレーでは、真剣勝負です。みんな必死で自分の家で、図書館で、研究室で勉強して、新しいプロジェクトを出して、そこへ世界中の若者たちが集まってくる中で競争しています。しかしながら、24時間コンビニが街の角を埋め尽くし、手を上げればタクシーがどこだって止まり、携帯で連絡すれば、すぐにどんな時間でも仲間たちが集まる。このような日本の環境に慣れてしまうと、「おもしろくないや」ということになってしまいます。

・アメリカの強さというのは、ひとつは多様性にあります。日本から派遣されて、現地に住んで、弁護士や、ベンチャー、あるいは研究などを自分の力で、相手と切り結びながら、自分の居場所を見つけていく日本人は全部で500人くらいではないのでしょうか。そういう人

たちは、ベトナムも、韓国も何千人規模。インド、中国は、万を超す。我々は、競争を、いろいろな国の人たちと切り結んでやっていくことが少なく、競争に負けていってしまうのではないかという、恐れは常にあります。

・プラットフォームというのは、いろいろな異種の技術を統合するところに生まれてきます。アメリカのような多民族社会というのは、意識の上でも、文化の上でも、価値観の上でも、そういった異なった多様性というものをどこかで一回統合しなければなりません。そうしないと国家として成り立たないのです。その作業というのを彼らは不断にやっています。

・アメリカは、異なった価値というものを平等に統合していくということで、今まで、たくましい道を歩んできました。日本は、異質の人たちのいない、同質的な民族ですから、居心地は大変いいんですね。基本的に、外のことは、よほど日本を脅かすようなことでもならない限りは雑音として処理してしまうわけです。外で何が起きているように関係ない。それで、自分たちの大変に居心地のいい生活を楽しむわけです。

・去年一年間でやったワイドショーの報道番組の総時間数のランキングによれば、ど根性ダイコンのダイちゃんの総放送時間が、去年1年間、あの日本に対して荒れ狂った中国での反日デモの総放送時間より長い由です。

・要するに、我々は、身辺雑記的な、ほほえましいこと、無難なこと、そういうことに夢中になっていて、そして、世界では何が起きているかということを知ろうとしません。

・多摩川にアザラシのタマちゃんが多摩川に現れると、テレビクルーがそこへ飛んでいって、「きょうは荒川でひなたぼっこをしておられます」。本当に我々の社会の中で追求すべき価値は何なのかを避けて通ってしまっています。

・我々は、社会の和を乱さない、人を傷つけないということさえしていれば、社会の中で安穩に暮らしていくことができます。ですから、極端なまでの敬語の使い方となり、悪意のない表現でも、「差別用語」として禁止される。ここで深刻なのは、言葉を美しく飾ることによって、我々は本質との対決を避けてしまっているところにあります。

3. パラダイム変換に向けて ～感動、情熱をもってシナリオを描く～

・国際社会は格段に便利に豊かになった、言うまでもなくITによってです。こういう中で、人を傷つけないとか、間違いを犯さないという、それだけでは、他のたくましい民族に後れをとっています。今では、国際社会では中国代表のほうが我々より英語がうまく、TPOを心得て、内容の深い発言をすることも多いです。要するに、前へ向かっていこうという進取の気質が我々には少なくなってきたしまっているんです。

・プロのカメラマンは、カメラはツールにすぎなくて、それを通じてどういうドラマを描き出すかというところに彼らの全芸術性がかかっています。例えば、乳飲み子を抱えているお母さんをずっと追って行って、ふとお母さんが顔を上げた、その瞬間をパシャッと捉

えます。要するに、シャッターを押すカメラマンではなくて、芸術家なのです。全体をどうやって、何のストーリーを自分はそこからカメラというものを通じて描き出すか。それがプロと我々アマの歴然たる差なのだと思います。

・パソコンも同じで、自分がどういう感動、情熱をもって、どういうシナリオを描こうとしているかということで初めて生きてくる道具だと思うのです。自分で直感シナリオを書いて、具体的に検索条件を増やしていくと、自分の目の前にあった500万件のデータが80万件になり、400件になり、そして最後は7、80件。これならば、全部、自分で1つ1つ参照してもいいかというところまで絞り込まれていきます。そのシナリオを書く能力というのはアナログの行動そのものです。つまり、デジタルではシナリオというのは書けません。これは人間の経験、直感、情熱、そういうもので初めて可能にするわけです。

・人間の頭は、まだ何十年もコンピューターが追いつけないような回路と素子を持っています。その中で常に電気信号が飛び交っています。それが結局は人間の頭脳活動、人間の感情、感性なのです。そうすると、どうやってそれを刺激してやるかというのは、私は、情熱であり、使命感だと思います。「自分がこれをやる」と思うかどうか重要です。

・私は役人時代に、いつも部下に、「やりたいと思うことを先に設定しろ」、「そして、そのために何が必要かを考えろ」という逆のプロセスを言っていました。「法律上できないということなら、法律を変えてしまえばいいじゃないか」と、私は極端なことを彼らに言っていたのです。最初に目的を設定して、どうやってそこへ向かうか。それに応じたことを自分で集めていく。自分の情熱、使命感が、このデジタル時代には、ますます必要になってきています。

・私は、人間にリアクト型とプロアクト型と2つのタイプがあると思っています。リアクト型というのは、周囲の環境が変わった時に初めてそれに自分に対応するために変わる、リアクトするということです。プロアクト型というのは、前へ出て自分で物事を変えていくということです。自分も環境の一部なのだから、自分が変わることによって環境が変わるのではないかと、こう思って前へ進んでいきます。

・富士通総研のセミナーにご参加くださっている皆さんは、「ちょっと行ってみようか」と思われたわけですから、そのこと自体が、私は、プロアクト型精神の発露だと思うのです。そういう能動的な形で今のIT時代に語りかけていくことができるかどうか、やがて日本のパラダイムを変えていくことにつながると信じております。